ドラマ内相互行為に現れる非流暢性要素の特徴
－日常会話との比較から－

伊藤 有梨（立命館大学学部生） 岡本 雅史（立命館大学）

1. はじめに

我々が普段何気なく行う会話には，言い淀みや発話重複など，無意識に産出され会話の流れを非流暢にする現象が多数存在する．本研究では，それらを「コミュニケーションの非流暢性要素」と呼ぶ．テレビドラマや映画，小説をはじめとするフィクション作品で登場人物が交わす会話は，台本がありデザインされたものであるため，一見するとそれらの非流暢性要素は創作会話において現れるはずのないものだと考えられる．しかし実際には，日常会話と比べると少ないかもしれないが，ある程度の非流暢性要素の存在が認められる．

そこで本研究では，非流暢性要素が創作会話でどのような役割を持つのかを明らかにする足がかりとして，擬似即興性[1]が最も高いとされるテレビドラマの会話 (佐々木, 1993) に出現する「言い淀み」「発話重複」に着目する．本研究では，テレビドラマにおける会話を，岡沢 (2021) に倣って「ドラマ内相互行為」と呼び，非流暢性要素の出現傾向を日常会話と比較することでその特徴を発見し，それらの演出的役割を明らかにすることを目的とする．

2. 関連研究

コミュニケーションの非流暢性要素は，語彙的な意味を持たない．ゆえに，情報の明晰な伝達においては文理解の妨げになるとされるが (小出, 1983)，一方でターン取得、発話権維持、発話内容の考慮・修正、前置き、心的態度表出、理解表出、といった機能を持つとされている (田中, 1981; 定延ら, 1995; 川森ら, 1996; 中島, 2010).

言い淀みの分類をした研究として田中 (1981) は，日本語での言い淀みの分類と機能の確立を試み，形態的特徴から，「反復」「言い直し」「有声休止」「無声休止」「その他[2]」の 6 種類に分類した．また，川森ら (1996) は，話し言葉に現れる非文法的で特徴的な現象をひとまとめに「冗長表現」と呼び，そのうち，「言い直し」には，舌のもつれなどの身体的要因によるものと，何らかの考慮によるものがあると指摘している．中島 (2011: 179) はフィラーを「それを取り去っても伝達する文・談話の命題内に変化を及ばさないもの」と定義し，職場での始業前，会議，休憩中の自然談話中から採取したフィラーを，先行研究を基に音声の形式から 12 種類に分類した．

Sacks ら (1974) は，会話における順番交替システムにおいて，複数の参与者が同時に話すことはよくあるが，いずれも短いことを指摘している．この複数人が同時に話す現象を，本研究では「発話重複」と呼ぶ．藤井ら (1994) は，発話重複は先行発話を妨害する場合もあるが，親しい関係では会話進行の促進に繋がることを明らかにしている．

また，創作会話には必ず「作者が伝えたい意図（主題）」が台詞の下に存在する (佐々木, 1993: 366) と指摘される．佐々木 (1993) によれば，違和感を感じさせずに受け手を作品へ没入させるために，作者は創作会話で日常会話に近い擬似即興性を生み出す一方，台詞を通して作者から受け手へのコミュニケーションの成立を試みる．こうした創作会話におけるコミュニケーションの二重構造性の下，受け手への主題の伝達が主要目的となるため，内容の明晰さが重視される．本研究では創作会話のひとつであるドラマ内相互行為において，擬似即興性による自然さの達成と視聴者への主題の伝達という，ときに相反する目的がいかに実現されているのかを非流暢性要素の観察から明らかにする．

3. 分析

3.1. 分析項目

本研究では，コミュニケーションの非流暢性要素を「言い淀み」と「発話重複」に分け，さらに，「言い淀み」を関連研

---

1 創作会話は，言い間違い，脱線，言い淀み，文のねじれなどの会話の即興性を持たないが，相互作用性や文脈依存性を高め，即興的に言われそうな表現が盛り込まれているとされる (佐々木 1993).

2 「強調」「介入音」「地の話と区別されるささやき」「気が付き」「長い沈黙」「文内遅速」「添音」を田中 (1981) は例として挙げる.

究 (田中, 1981; 川森ら, 1996; 中島, 2010) を基に、以下の 5 種類に分類し，分析対象とする[3].

1) **言いつかえ**　発語頭の数音節が無意味に繰り返されるもの，もしくは，無意味な介入音が挿入されるもの
例)【ドラマ [9] 03:06.20-03:09.61】同級生の子に告白してたら: ん 急に雷鳴って:

2) **言い直し**　すでに発話した語句が何らかの考慮のもので訂正・取り消しされるもの
例)【[C002_004] 00:50.45-00:52.92】じゃまだお子様の お子様の時間帯だったのね

3) **長音化**　有意味語の一部の音が非語彙的に 0.2 秒以上引き伸ばされたもの
例)【ドラマ [1] 00:59.18-01:02.73】捨てたはずの物が机の上にあって:そういうの嫌なんで

4) **フィラー**　取り去っても伝達する命題内容に変化を及ばさないもの (中島, 2010)
例)【ドラマ [8] 00:04.35-00:06.71】え 私 なんか言ってました

5) **無声休止**　一文の区切り外に発生する 0.2 秒以上の無音区間
例)【ドラマ [2] 00:28.37-00:30.31】もしかして (0.37) 料理男子

また，ドラマ内相互行為に現れた「発話重複」は，先行発話と重複する位置，及び後行発話の種類によって，以下の 4 種類に分類できた．右の図 1 は本研究で扱う非流暢性要素の分類をまとめたものである．

1) **割り込み**　先行発話の命題途中に後行発話が発せられる

2) **発話末重複**　先行発話の末部に後行発話が発せられる

3) **あいづち**　聞き手行動としての応答詞、相槌、笑いを含む

4) **独り言**　アドレスのない発話

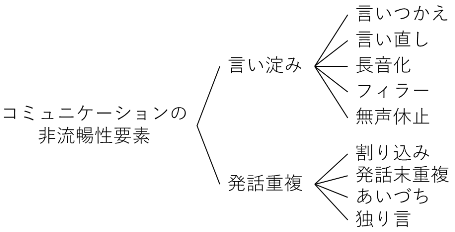

図 1. 非流暢性要素の分類

3. 2. 対象データ

分析にあたり両会話から, (1) 3 人以上での会議場面, (2) 3 人以上での飲食・喫茶場面, (3) 2 人での飲食・喫茶場面, (4) 2 人での歩き話・立ち話場面, の 4 場面を対象として抽出した.

ドラマ内相互行為は，日常会話との類似性を考慮し，登場人物の日常場面を描く（ラブ）コメディ，ホームドラマなどのジャンルから，2016 年以降に地上波で放送された国内ドラマを 8 作品選出し，計 41 シーン（51 分 46 秒）を分析する．該当シーン開始部から次のシーンへ切り替わる直前までを分析対象時間とした. また, 抽出の際「傍観者 bystander」(Goffman 1981) からの割り込みのある部分, 過去の出来事を振り返る回想の部分，及びナレーションは除外した[4].

表 1. ドラマ内相互行為 分析対象作品

番号	作品名	対象話	制作局	放送日
[1]	逃げるは恥だが役に立つ	第1話	TBS	2016年10月11日
[2]	私の家政婦ナギサさん	第1話	TBS	2020年7月7日
[3]	地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子	第1話	日本テレビ	2016年10月5日
[4]		第2話		2016年10月12日
[5]	東京タラレバ娘	第1話	日本テレビ	2017年1月18日
[6]	奥様は、取り扱い注意	第1話	日本テレビ	2017年10月4日
[7]	獣になれない私たち	第1話	日本テレビ	2018年10月10日
[8]	姉ちゃんの恋人	第1話	関西テレビ	2020年10月27日
[9]	大豆田とわ子と3人の元夫	第1話	関西テレビ	2021年4月13日
[10]		第2話		2021年4月20日

表 2. 日常会話 分析対象データ

場面	CEJCデータ
(1) 3人以上での会議場面	K004_013
	T009_006
(2) 3人以上での喫茶・食事場面	K002_018
	S001_006
(3) 2人での喫茶・食事場面	K003_012a
	C002_004
(4) 2人での歩き話・立ち話場面	C001_005
	T009_017

比較対象とする日常会話データは『日本語日常会話コーパス (CEJC)』モニター版 (小磯ら, 2019; 2020) から 8 会話を選出した．ドラマ内相互行為と同様，参与者外部からの割り込みがない会話部分を選び, 対象となる発話開始時からの 5 分を抽出した．なお，5 分時点が発話途中であった場合は，その発話の終了時までを対象とし，計 40 分 8 秒を日常会話の分析対象とした.

3. 3. 分析方法

ELAN を用いて発話内容を書き起こし，言い淀みと発話重複が，発話のどの位置に出現しているかをタグ付けした．出現位置は，前後に発話のない「単独」，言い淀み類を除いた有意味語以前に現れる「発話頭」，有意味語以降の「発話中」，句点の直前である「発話末」に分けてタグ付けを行った．次に 3.1 節で述べた 5 種類の「言い淀み」をアノテーションし，各言い淀みの出現位置及び出現回数，発話重複の発話時間における占有率を調べた．さらに,「フィラー」に関しては，中島 (2011) を参考に音声面で，「母音型」「コソア型」「エート型」「ナンカ型」「マー・モー型」

3 分類と共に例として，対象データから該当箇所を挙げる．括弧内には，データ名と該当箇所の時間を示す.

4 ナレーションが挿入される部分は，登場人物が話す素振りを見せていない場合はドラマの実時間中であると見なし，分析対象とする.

「ンー型」「ハイ型」「ヤー型」「ヘー・ホー型」「ホラ型」「デ型」「ネー型」の 12 種類に分類を行った[5].

分析結果を基に，ドラマ内相互行為と日常会話との比較を行い，ドラマ内相互行為における非流暢性要素の出現傾向からその役割を検討した．なお，発話内容の書き起こしに際して，発話単位は JDRI (2017)，転記に使用されるタグは臼田ら (2018) の基準に基づく．

4. 分析結果と考察

4. 1. 「言い淀み」の出現特徴

分析の結果，4 場面全体における言い淀みの 10 分あたりの総出現数は，日常会話の出現数（1337 回）がドラマ内相互行為（872 回）よりも多いことが分かった（図 2）．言い淀みは，ドラマ内相互行為では確かに減ってはいるものの、日常会話の約 7 割近く現れていたことから，ある程度以上の出現は許容されていると考えられる．

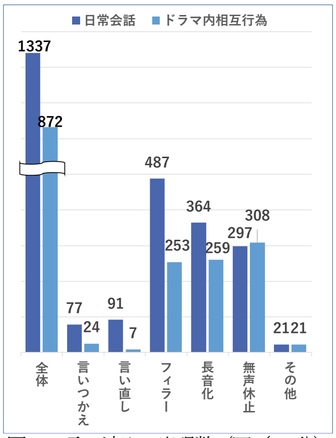

図 2. 言い淀みの出現数（回／10 分）

言い淀みの分類別の出現頻度は，両会話で出現傾向が異なった（図 2）。ドラマ内相互行為の特徴として，「フィラー」「長音化」「無声休止」が全体の 94%を占めていたことと，「言いつかえ」「言い直し」がほとんど見られなかったことが挙げられる．また，「フィラー」も日常会話の 53%しか出現していない．このことからドラマ内相互行為では，内容伝達に障害をもたらしやすい言い淀みは減少し，代わりに「長音化」「無声休止」が出現しやすい特徴があると言える．つまり，内容伝達を阻害する可能性のある言い淀みが，「長音化」「無声休止」に代置され，発話内容が分かりやすくなるように会話がデザインされていると考えられる．

表 3. フィラーの分類別出現頻度（回／10 分）

類型	日常会話	ドラマ内相互行為
母音型	158	120
コソア型	72	23
エート型	18	4
ナンカ型	51	4
マー・モー型	48	23
ンー型	55	17
ハイ型	20	4
ヤー型	9	23
ヘー・ホー型	8	5
ホラ型	8	4
デ型	32	9
ネー型	8	17
合計	487	253

言い淀みの出現位置では，両会話とも「フィラー」は発話頭に，それ以外の「言い淀み」は発話中に現れやすいことが分かった．「フィラー以外の言い淀み」の出現位置は，両会話で違いは見られなかった (単独：0.5%以下、発話頭：約 10%，発話中：約 70%，発話末：約 20%)．日常会話では，発話中に現れる「言いつかえ」「言い直し」の内，文の意味上の区切り以外（単語内など）で「無声休止」を伴う「言いつかえ」が発生していたり，言い間違えを正す「言い直し」なども多発していたり，文の内容伝達において障害となりやすい事例もよく見られたが，ドラマ内相互行為では観察されなかった．一方，フィラーの出現位置は両会話で多少の違いが見られた．両会話とも発話頭が約 60%で，発話末（日常会話は 4.3%，ドラマ内相互行為は 2.1%）にはあまり現れなかった点が共通していたが，ドラマ内相互行為では日常会話と違い，発話中 (9.2%) よりも発話頭 (23.7%) に多く出現していた．

フィラーの分類別の出現頻度の比較から，日常会話とドラマ内相互行為で出現しやすいフィラーが異なることが明らかとなった（表 3）．日常会話で多くみられる「ナンカ型」がドラマ内相互行為ではほとんど観察されず，「コソア型」や「エート型」も大幅に減少している．これらのドラマ内相互行為に現れにくいフィラーについて，「コソア型」は定延ら (1995) でも述べられるように，言語編集の心的操作標識として現れ，名前の検索や適切な表現の検討を行う際に表出される．また，中島 (2011: 206) は「ナンカ型」には，和らげ表現の機能とともに発話展開を考える際の間つなぎ語としての機能をもつことに言及している．以上のことから，ドラマ内相互行為では，発話内容の考慮・修正機能のあるフィラーは出現傾向が低いと考えられる．これは，役者が，登場人物「責任者 (principal)」から，与えられたテキストを発声する「発声者 (animator)」(共に，Goffman 1981) へと，話し手の立場が移ったと視聴者に思わせないためであると考える．

4. 2. 「発話重複」の出現特徴

発話重複の発話時間占有率を比較した結果が図 3 である．日常会話と比べるとドラマ内相互行為では発話重複がほとんど起きておらず，スムーズに発話の順番交替が行われている．また，日常会話での発話重複の発話時間占有率が高かったのは，発話の分裂がよく起こっていたことが原因として考えられる．

両会話とも 3 人以上での会話場面の方が発話重複の発生が多かった．これは，会話への参加人数が増えれば，発話順番を競合する機会や相手が増えるためであると予想できる．しかし，日常会話は場面による発生度合いに大きな差があるのに対し，ドラマ内相

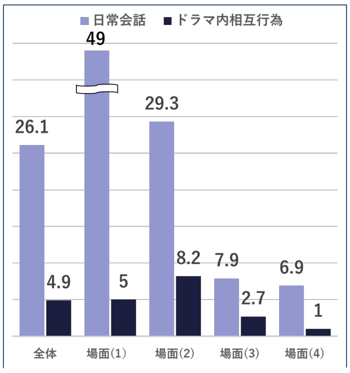

図 3. 発話重複の発話時間占有率 (%)

[5] この分類には，研究によってはフィラーとして扱われないものも含まれる．しかし，本研究では，中島 (2011) の定義を基にドラマ内相互行為に現れるフィラーを幅広く扱うために，この分類を採用する．

01	倫子	8年前:. (0.2) 一度フッた人から誘われましたっ.
02		(0.2)
03	小雪	[え::::. (Dチ)ちょっと [待って. (X##) 8年前誰だ？]
04	香	[(Uうぇや::::.)やばいやばいやばい(Uやばい. 待って.[だれ.)だれだれだれだれだれ.]] @後方にのけぞった後立ち上がる.
05	倫子	[(X ###)]@音声なし. 香の手を引っ張って座らせる.
06		(0.3)
07	小雪	あ. あ. ね. もしかして(0.109) ADの先輩だったダサ男くん?

事例1：発話重複で背景化された倫子の発話【ドラマ[5] 00:04.08-00:14.92】

互行為ではどの場面も10%未満であった. このことから, 日常会話では発話重複しやすい場面でも, ドラマ内相互行為では場面に拘らず発話重複が起きていないことが明らかとなった. 特に, 先行発話と重複部分が多くなりやすいため阻害度が高いと考えられる「割り込み」「あいづち」「独り言」は日常会話よりも少なかった. 以上より, 視聴者の内容理解度を損なわないために, 発話重複は回避されていると考えられる.

さらに, ドラマ内相互行為では, 発話重複が3人以上の親しい間柄での会話場面に起こりやすいことも分かった. 例えば, 場面(1)においても, 他部署を交えた緊張感の高い会議よりも部署内のミーティングでよく起きていた. このことから, ドラマ内相互行為の発話重複は, 親しい間柄で会話が促進されている, 場の盛り上がりを示す役割を持っていると考察する.

ドラマ内相互行為の特徴的な発話重複として,「割り込み」での発話の背景化が挙げられる. 事例1は場面(2)の, 3人での女子会シーンである. 01行目の倫子の発話に反応して, 香と小雪の発話が重複した状態が約4.2秒続く (03行〜05行). その間, 03行目の「待って.」の後の発話が聞き取りづらくなり, 二重傍線部の倫子の発話 (05行目) は音声が消去されていた. その後, 小雪の03行目の「8年前誰だ？」が音量的に強調され, 会話の展開に繋がる小雪の07行目の発話が続く. ゆえに, 07行目の発話は主題展開に関わる発話であると考えられる. 直前の小雪の発話, 及び, 傍線部に重なる倫子の発話が話す素振りを見せるだけに留まっているのは, この発話を目立たせるためであると考えられる.

5. おわりに：まとめと今後の課題

分析の結果, ドラマ内相互行為の非流暢性要素は日常会話よりも現れにくいが, 一定数の出現が認められた. その出現特徴から, ドラマ内相互行為では, 作者と視聴者というレベルのコミュニケーションにおける情報伝達が重視されており, その障害とならない範囲で非流暢性を出現させて会話の即興性が再現されていること, 現れた非流暢性要素は前置きや感情表出機能を持つこと, が明らかになった.

本研究で使用したデータは, 数が少なく, また, 出演者の偏り, 発話者の偏りが見られ, 個人の話し方の癖等を排除しきれていない可能性がある. 分析に際して, 客観性を重視して言い淀みの分類をしたことにより, 無声休止と長音化において, 故意に入れられた発話の間や長音と, 不可抗力的に発生したものとを区別することができなかった. これらは, 視線や身振りなど, 非言語的要素にも着目することで明らかにできると考える. 現れた非流暢性要素ひとつひとつの機能を明らかにすることで, さらにその役割を検討したい.

謝辞 本稿の執筆にあたって, ご助言をいただいた千葉大学の伝康晴先生, 東京工科大学の榎本美香先生, 立命館大学の城綾実先生に心より感謝いたします.

参考文献

藤井佳子・大塚純子 (1994). 会話における発話の重なりについて―協力的側面を中心に― 言語文化と日本語教育, 8, 1-13.
Goffman, E. (1981). *Forms of Talk.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
JDRI (Japanese Discourse Research Initiative) (2017). 発話単位ラベリングマニュアル version 2.1.
川森雅仁・島津明 (1996). 話し言葉における冗長表現の解釈 情報処理学会研究報告音声言語情報処理 (SLP), 1996(123), 31-38.
小出慶一 (1983). 言いよどみ 水谷修 (編) 話しことばの表現 筑摩書房 pp. 81-88.
小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2019). 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴 国語研究所日常会話コーパスプロジェクト報告書 3.
小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2020). 『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析 国立国語研究所論集, 18, 17-33.
中島悦子 (2011). 自然談話の文法―疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞― おうふう.
岡沢亮 (2021). コメディドラマ内相互行為における誤解とユーモア 人工知能学会研究会資料 言語・音声理解と対話処理研究会, SIG-SLUD-092, 45-50.
Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974). A Simplest Systematics for organization of Turn-Taking for Conversation, *Language*, 50(4), 696-735. (H・サックス他. 西阪仰[訳] (2010). 会話のための順番交替の組織―最も単純な体系的記述― 会話分析基本論集―順番交替と修復の組織, 界思想社 pp. 5-153.)
定延利之・田窪行則. 1995. 談話における心的操作モニター機構―心的操作標識「ええと」「あの(一)」 言語研究, 1995(108), 74-93.
佐々木倫子 (1993). 会話の自然さについて：日英対照研究の視点から 国立国語研究所研究報告集, 14, 361-401.
田中敏 (1981). 日本語発話における言いよどみ現象の分類と特徴づけ 心理学研究, 52(4), 213-318.
臼田泰如・川端良子・西川賢也・石本祐一・小磯花絵 (2018). 『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法 国立国語研究所論集, 15, 177-193.